



# 室外機が支える国



ヨシダ サトシ

ギリギリ出勤に間に合う午前七時半に目が覚めた。

会社の人間たちへの復讐として二度寝を楽しんでやろうとしたが、カーテンからじりじりと伝わってくる熱気で目を覚ました。会社に首を切られた次の日くらい、二度寝を楽しんでもいいはずなのに。

大通りに面し、さらに駐車場が目の前にあるこのマンションは1階でも日当たりがいい。それが難点になるのは夏だけのはずだった。平手打ちをするようにカーテンを開ける。コートを脱いで上着を袖をまくり駅へ向かう人達が目に入った。

昨夜の天気予報で「春夏秋冬が仲違いを起こし、春と冬が日本から出て行きました。明日は冬至ですが夏至に変わります。夏がきます」と女性キャスターが、わざわざ外に出て体を震わせながら言っていた。紺のマフラーに首をすくめさせ、わざと体をふるえさせる演出家がいるのか？ いるとしたら、明日の天気予報では夏が突然やってきことを表現するために、天気予報を伝えながらコートを脱いで夏服になるという演出をするだろうと予想した。

しかし、明日になれば夏になるなんて、そんなバカなことが起きるものかと思っていたが、一夜で夏がきてしまった以上、信じるしかない。エアコンを冷房設定にに変え、電源を付けた。インスタントコーヒーを飲みながらスマホでSNSをチェックすると、やはり夏の話ばかりで冬と春がなぜ仲違いを起こしたかの憶測が飛び交っていた。

”冬はおとなしい雰囲気しているくせに主張が強すぎるし、春も俺が季節の中心って顔していて秋と冬は付き合いきれなくなったんだろうよ。

”ケンカくらいで急にいなくなったりしないだろ。冬と春がどこかに駆け落ちしたって可能性のほうが高いんじゃないか？”

”秋と冬しか来ないってことは4月から9月がなくなるってことでいいのか？”

”春夏は3月から8月じゃないのか？”

”冬が終わって秋になったら、それは春じゃないのか？”

SNSに飽きてゲームでもしようかなと思った時、部屋が涼しくなっていないことに気づいた。設定温度をいくら下げても効かない。エアコンをよく見ると電源ランプが赤く点滅していた。エアコンの製品番号、エラー、点滅と検索をかけると室外機との通信エラーだと分かった。

ベランダに出ると室外機が消えていた。壁から室外機につながっていたパイプは力なくぶら下がっている。室外機のあった場所には虫の死骸や排気ガスで黒ずんだ埃が溜まっていて、それらが室外機の底と壁側の面積をあらわしていたので、ぼんやり室外機の体積が想像できた。

持っていたスマホで室外機と入力すると盗難というキーワードが表示された。昨日までは暖房が使えていたから、昨日の夜から今朝までの間に盗まれたのか？ 壁1枚挟んでいるとはいえ、すぐ横で寝ていたのに全く気が付かなかった。

管理会社は時間が早いせいなのか電話に出ない。買い直すとしたらどちらがいくら負担するのだろうか？ 警察に電話をすると、すぐに2人の警察官が家にやってきたのでベランダを見せた。急に夏がやってきたせいで2人とも冬の制服で、盗難現場に汗をベランダにポタポタと流していた。刑事ドラマで似たシーンがある時は決まって、よく怒られているが2人は全く気にしていないようだった。

「最近、多くなってる室外機泥棒だと思います」

若い警察官は帽子をとって汗を袖で拭いながら僕に言った。アイドルみたいに快活な笑顔に見えたのは僕よりも10歳くらい若いせいだろう。30歳を過ぎると途端と年下が輝いて見える。

「ところで、」

と、もう1人の警察官がハンカチで汗を拭いながら言った。僕と同年くらいの警察官は若い警察官とはまるで反対の顔をしていた。前途洋々の彼に比べて、現在多難と言っているくらい疲労が顔に出ている。

「犯人を見つけてほしいですか？ それとも室外機を見つけて欲しいですか？」

僕が質問の意図を理解するのに時間がかかっているを察してか「言葉のとおりです」と言葉を足して、「2つも望むなんて贅沢病の極みです」と諭すように言った。

「まあ、どちらかと言えば、でいいですよ」

若い警察官の方は相変わらずの笑顔で僕に言った。汗を流している警察官2人と狭いベランダに立っていると余計に暑苦しく感じる。

「室外機、ですかね？」

「では、私達は室外機を見つめますから、代わりにお願いがあります」

「お願い？」

「あなたの室外機を盗んだ人を見つけてください。空いている時間でいいですから」

「え？ 犯人を捕まえるのが警察の仕事じゃないんですか？」

「まあ、それはそうなんですが。目的が室外機の方が重要であれば私達がそれを探した方があなたのためです。犯人が捕まっても、盗難された物は返ってこないですから」

犯人が捕まったところで僕のもとには室外機はかえってこないかもしれない。そうすると、警察が室外機を見つけてくれた方がいい。

「犯人を見つけないと室外機は見つからないんですか？」

「いえ、そんなことはないとは思いますが。見つけて頂いたほうが室外機をすんなり渡せると思います。犯人が見つからなくてもあなたにぴったりの室外機が見つければお渡しします」

どちらにしる警察が室外機を見つけてくれるなら僕に損はないので、犯人を探すことにした。

「犯人ってどこにいますかね？」

現在多難の警察官が僕の質問に答えた。

「そうですね。昨日までエアコンを使っていたということから、あなた寝ている間、犯行が行われた。おそらくプロです。ここに行くとなんか情報が分かるかもしれない。盗難のプロが出入りするカフェです」

メモを僕に渡した。メモには隣駅からスタートする地図が書かれていた、

「カフェに行ったら「ブレンドを3つとガトーショコラ3つ」と言ってください」

警察官2人は部屋を出て行った。カフェを検索してみると、朝から営業をしている。僕もエアコンの効かない部屋から逃げたいので、すぐにカフェに向かうことにした。夏以来洗濯していない少しのおうTシャツに着替え、駅へと向かった。ラッシュ時間の過ぎた下り電車は比較的空いていて、ラッキーだった。

犯人のことを考えた。泥棒をしなければいけない人生はどんなものだろうか？ しかも室外機。検索して見ると目的は中の銅線らしく、それを売ってお金にするらしい。被害は多いようだが実入りが多いものではなさそうだった。しかし、無職となった今、明日は我が身だとも思える。

もしかしたら、企業の戦略なのかもしれないと考えた。壊れたくらいじゃ修理ということになって儲けがない。盗まれれば買い直すしかない。その可能性は捨てられない。車の盗難なんて昔からある。自動車会社はは大企業だ。

例えば、自動車会社Aがあったとする。

自動車会社Aでは車Aというのを販売していた。

Aさんは車Aを購入したが、一ヶ月後、A町内のコンビニAで車Aは盗難された。

幸い、Aさんは自動車会社Aのグループ会社が経営する自動車保険A（プランはプレミアムタイプAだ）から保険金が支払われ、再び車Aを購入した。

Aさんの車Aを盗んだ窃盗集団Aは、実は自動車会社Aの社長Aが指揮する窃盗集団だった。

盗みを働いたところで支払う保険金や再購入された車の収支を比べればたかがしれているが、盗まれた時でも懇切丁寧に対応するように指導しているのは

、自動車会社Aにいいイメージを植え付けるためだ。  
こうして自動車会社Aは不動の地位を保っていた。  
そんな策略にはまっているとも知らず、Aさんは今日も車Aを運転している。

1日で冬から夏に変わった気温変化についていけず、粘度の高い汗が背骨に沿って流れ、ボクサーパンツのゴムの部分に吸収されるくり歩いたところで、カフェに到着した。駅から続く商店街と住宅街にあり、人通りも多い。カフェというより喫茶店に近い作りで、革張りのソファが並んでいた。Cafe ONO」と書かれた看板と同じロゴのTシャツを着た女性店員に案内され席についた。僕の他に、少し離れた席で保育園に通う子供の話を盛り上がる女性二人と、カウンターでスポーツ新聞を読む老年の男性がいるだけで、席数の3分の1は埋まっていた。

盗難のプロが出入りするカフェということは、あの女性二人もあの老人も、泥棒の可能性が高い。何を盗むんだろう？ 子供の話をしているから子供を誘拐して人身売買を、老人はその集団の親玉だと想像してみたが違う気がした。

カウンターの向こうにいる店長に目をやる。坊主で髭面、首や腕が太い。かなり鍛えているに違いない。メニューを持ってきた店員に僕は「ブレンド3つとガトーショコラ3つ」と他の客には聞こえないように声を抑えた。

店員が店長に耳打ちをすると、店長がこちらへやってきた。

「お手洗いはこちらです」

トイレの横にあるスタッフルームに案内された。狭い部屋で二人きりになり、店長は折りたたみ式のパイプを広げて僕を座らせた。棚には書類、清掃用具、焙煎前のコーヒー豆、先ほどの女性店員のものと思われるバッグが開いていた。携帯、手帳、ポーチが2つ、小さな緑のハンカチタオル、DSが几帳面に収まっていた。

店長はテーブルの上に伝票を広げて「ご用件は？」と言った。店長の丁寧に整えられヒゲは首を見ながら「室外機を盗んだ犯人を見つけにきた」と言うべきか迷った。もしかしたら、室外機を盗んだ犯人の仲間かもしれない。

しかし、ここまで来たのだと腹をくくって事情を説明した。説明している間も店長は伝票整理を続け、説明が終わる頃になって店長はペンを持ち、メモ用紙に地図を書いた。

「室外機系でしたらここへ。202号室です」

メモには隣の駅から始まる地図が書かれていて、ゴールには部屋番号が書かれていた。

「紹介料は1万です」

お金を取られるとは警察から聞いていなかった。サイフを見ると5000円しかないで、ATMに行き、お金をおろしてからカフェに戻りお金を払った。

「そのアパートは窃盗集団のアジトばかりですが基本的には安全です」

店長はそう言ってレシートくれた。そこには「0101 紹介料 ¥10,000」と書かれている。このお金は警察が払ってくれるのだろうか？

さっそく室外機を盗んだ犯人がいるアジトへタクシーで向かった。無駄な汗をかかずにすんだ。やった。紹介されたアパートの敷地内には放置自転車や室外機が積み重なっている。ここで間違いないという確信を得て、202号室へ向かった。

ドアの前で大きく深呼吸をしてインターホンを鳴らした。

「はい」

愛想のないガサツな返事だった

どんな人間か想像する。他人に対してむやみに攻撃的で、相手が怯んでいないと会話ができない。役所めいた敬語ができないため、相手の言葉が大人の言葉であればあるほど、勝手に腹を立て、不躰な態度をとるような人間だろう。こうした人間は感謝の念が足りないし、ろくな教育を受けていないはずだ。

「こちらは室外機の窃盗集団でよろしいですか？」

「まあ」

「室外機を返してもらいにきました。昨晚、我が家の室外機が盗まれてしまして、とても困っています」

しばらく間があった。相手の神経をさかなでさせるように丁寧な言葉遣いをした。変身したような気分だ。

「なんだよ。返せっていの？」

「そうではなくて、私の室外機を盗んだ犯人を教えてくださいたいのです」

「家はどこ？」

「〇〇町〇〇番地です」

「ああ。それを盗んだのを最後に辞めたよ」

「辞めた？」

「そう。もう働きたくないって言ってさ。こっちも3人になっちゃったから窃盗集団って名乗るには人数が少なすぎて困ってるんだよ」

「どこにいるか教えてくださいませんか？」

「いいけどさ、その代わりお願いがあるんだよね。戻ってくるようお願いしてくれないかな？ 人手が足りなくて困ってるんだよ。腕がいいんだよ、アイツ。物を盗む才能があるんだよ」

一方的に辞めた人間の住所を言われ、「頼んだよ」とインターホンが切られた。とにかく犯人が住む場所は分かったのでスマホに住所を入力した。犯人が住むアパートはすぐ近くだった。警察に連絡をすべきか悩んだ。

暑い中、ここまでやってきて犯人を見ずに帰るのはしゃくだったので、せめて犯人の顔だけでも見ておこうと思った。スマホに表示された地図をなぞってアパートへ向かい、途中のコンビニでお茶とアイスを買った。355円だった。アイスが食べ終わるころ、目的地に到着した。

アパートは先ほどのよりもずっと古く、1階の部屋の窓は割れていた。階段は体重をかけると抜けてしまいそうなほど錆ついていた。錆の臭いが熱気に溶けて鼻をつく。2階は2部屋あり、それぞれのドアの前に置かれた洗濯機は汚れている。廊下にある雨よけのプラスチック製の波版は割れていて、先のほうは凶器になりそうなくらい尖っていた



。

インターホンはないので、ドアをノックした。返事がないので何度かノックを続けた

。

コン

コン コン

コン コン コン

コン ココン コン

コン コン コン コン

コン ココン コン コン

ドアの横にある窓が開いた。寝癖の髪も、寝起きの表情も直さず、眠い目をした男の顔が現れた。突然、起こされたことに腹を立てているようで、こちらを睨んでいる。かなり若い。二十歳にもなっていないように見えた。

「だれ？」

「あなたに室外機を盗まれたものです」

目がハッキリと開いた。人の意識がはっきりと覚醒する瞬間に立ち会え、得をした。

「なんの話だよ」

「昨日、アナタが盗んだんでしょ？ あなたのお仲間に聞いたら、お前が昨日盗んだと聞きました」

男は力を込めて窓を閉めた。窓の立て付けが悪いのか「きゅるる」という音がした。なぜ立て付けが悪くなったかと考えた。老朽化というものもあるが、震災の影響も否めないと思った。再び、ノックをした。返事がないので何度かノックを続けた。

コン

コン コン

コン コン コン

コン ココン コン

コン コン コン コン

コン ココン コン コン

コココン コン

コン コン

コン ココン コン ココン

コン コココン コン

コン ココン ココン コンコン

コン コココココン コン コン

「うるせえよ！ しつこいんだよ！ 俺は辞めたんだよ」

ドアの向こうで男は怒鳴った。

「辞めたからって、僕の室外機が返ってくるわけじゃないです」

男の返事はない。

「なんで辞めたんですか？ 帰ってきてほしいみたいですよ」

「あんなところで働いてられるか！ 休みはないし、薄給だし、よく怒られるし、たまに殴られるし。朝から晩まで働いても、こんなアパートにしか住めないんだぞ」

「あなたの仲間は『腕がいいんだよ』と言ってましたよ。見込みがあるからよく怒られるし、たまに殴られるんです」

返事がないので続けた。

「あなたの腕が確かです。室外機が盗まれた時、僕は寝ていたんです。普通の室外機泥棒だったら物音で起きていましたよ。しかし、僕は起きなかった。なぜか？ それはあなたの腕が良かったからです。あなたが物音一つ立てずに盗みを行ってくれたおかげで、僕は睡眠を邪魔されなかった。その盗みの技術を教えてくれたのは、あなたの仲間だったんじゃないですか？ あなたに才能があるから怒られるんです。あなたに才能があるからこそ、時には殴られるんです。ねえ、戻りましょうよ。仲間の元に。あなたを必要としてくれている人がいるんですよ？」

男の返事はなかった。返事がなかったのでさっき言っていたようなことをずっと繰り返

返した。どんなに期待をされているのか、いかに怒るほうが繊細で気を使って相手を思った言葉を選んでいるのか、泥棒という職業が犯罪行為でありながらどうして物語の題材として繰り返し使われるのか、どんな職業であれ働くということがどんなに夢のあることなのか、不景気に薄給だと嘆くのがいかに傲慢なことなのか、なぜ給料が出るだけマシなのか、質素な生活がいかに素晴らしいのか、高給取りで贅沢なマンションに住む連中がどれだけ悪い奴らなのか、それに比べあなたはどれだけ素晴らしい人間なのか、なぜあなたの仲間はあなたを本当の家族のように思っているのか。

何度も何度も繰り返し説いた。

「わかったよ。戻るよ」

男が言った。僕はスマホを取り出し、もう一度言ってもらうようお願いし、録音ボタンを押した。

「明日には戻るよ。だから帰ってくれ。頼むよ」

録音を停止ボタンを押した。ドアの前にある洗濯機を開けて飲みかけのお茶を全部入れ、残った空のペットボトルも中に入れた。窃盗集団のアパートに戻り、インターホンを押した。

「はい」

「先ほど、お伺いしたものです。戻ってきてくれるそうですよ。ほら」

先ほど、録音した声を男に聞かせた。

”明日には戻るよ。だから帰ってくれ。頼むよ”

「おお。ありがとうな」

「いえいえ。で、室外機はどちらに？」

「下に室外機が積み重なってるところあるだろ？ その一番上にのってるのがあんたのヤツだよ」

「分かりました。もう、うちのは盗まないでください」

「分かったよ。あんたの家の室外機は盗まねえよ」

僕は1階に降りて、自分の室外機を見つけた。さすがに炎天下の中、室外機を抱えて家まで帰るのはツライのでタクシーで帰宅した。家について室外機を設置した。やり方はスマホで調べた。

設置し終えたところで警察に連絡をするのを忘れていたことを思い出し、警察に電話をして犯人を見つけたと話した。署の方に来てほしいと言われ、僕は懐事情と無職の現状を考慮して、徒歩で警察署に向かった。今日は仲介手数料を払ったり、タクシーに乗ったりとお金を使いすぎた。

僕のマンションにやって来た警察官とは別の人間が対応した。カウンターで向かい合わせに座っている。あちらは革の椅子で、こちらはパイプ椅子。

「犯人が住んでいる場所を教えてくださいませんか」

うちにやってきた人間よりも愛想がなく事務的な口調だった。顔は六角形にナイフで切れ目だけをいれたような単純な顔している。せめて丸い切れ目にすれば多少なりとも愛想は生まれるのに、そんな努力をしようもしない。こちらは犯人を見つけてきたというのに失礼な人だ。

「ここ」

僕は男のアパートの住所を教えてやった。

「ありがとうございます。では、こちらの書類に記入をお願い致します」

書類に記入しているところを、無言のままじーっと見られて非常に気分が悪くなった。

「ほらよ」

「はい。ありがとうございます」

「ねえ、感じ悪くない？ こっちは犯人の居場所を見つけてきたんですけど？」

「ええ、ありがとうございます。こちらも室外機を見つけておきましたよ。同じ型です」

から使えるはずです」

「え？ 室外機？」

「ええ。あなたが室外機を見つけてほしいと所望されたので、見つけました。犯人の居場所を見つけた対価としてお受け取りください。」

「ああ、でも室外機は」

窃盗集団から室外機を受け取ったと言ってしまったらどうなるのか？ もしかしたら、警察が用意した室外機の金額を請求されるかもしれないと勘ぐった。

「どうされました？」

「いやさ、そうじゃなくてアナタの態度が悪いんじゃないかって話をしてるの。こっちはさ。分かる？」

相手の事務的口調が相手をどれだけ苛立たせるか注意をして、僕は室外機を受け取り、タクシーで帰宅した。

なぜか室外機が二台になってしまった。部屋に置くのは邪魔なので、ベランダに置いた。警察がくれた室外機と取り返した室外機が並んでいる。警察がくれた室外機は新品同様の美しさで、僕が取り返した室外機は汚れている。

冬と春が突然いなくなったせいで急遽登場した夏は猛威をふるい、熱帯夜となった今夜は冷房をつけた。室外機がある人生は素晴らしい、とベッドの中で思った。寒ければ温めくれる。寒ければ温めてくれる。

しかし、どうして室外機が二台になってしまったのか？ これはどういうことなのか考えた。もしかしたら警察も窃盗集団もメーカーもグルなのかもしれない。いや、コンビニだってタクシーだってそうだ。自分の1日だけでたくさんの経済効果があったはずだ。こんな風に経済を回している国があってもおかしくない。

例えば、Aという国があったとする。